

ストーブリーグに入ったプロ野球で横浜の活発な動きが目立つ。巨人コーチだった尾花高夫氏を監督に迎え、ロッテから清水と橋本将を獲得、日本ハムとは3対3の交換トレードをまとめた。チームの出直しを陣頭指揮するのは、10月に就任した加地隆雄社長(69)だ。「チームをとことん立て直したい」と運営面での変革にも取り組む。

テレビ番組制作会社の元社長で、「水戸黄門」などを手掛けた加地社長は、30年ほど横浜に住み、シーズンシートも購入してきた筋金入りの横浜ファンだ。地元での人脈の太さに、横浜の親会社、TBSが白羽の矢を立てた。

「強い横浜」へ変革期す

新体制で出直し 加地新社長がリード



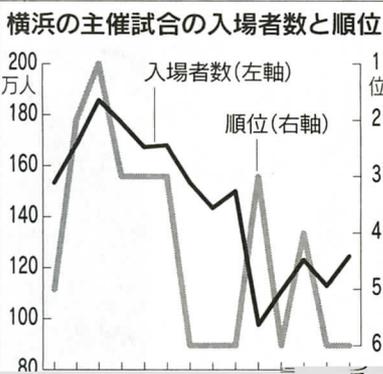
「チーム改革のために自らセールスマンも務める覚悟」と意気込む

地元意識 経営面も強化

理栄養士ら12人が一体となった選手の身体能力を分析し「電子カルテを作成。科学的に選手の伸び幅が見えるようにした」と佐藤貞二常務は言う。情報分析の専門会社「データスタジアム」にも横浜向け特別版を発売した。「アナライジング・ベースボール(分析野球)」を掲げる尾花監督を迎えるのを機に、選手でも苦しんでいる。TB

肉體、頭腦の基礎づくりにからやり直そう、という。高卒新人が着実に黒字を取り纏う状況からどう抜け出すか。小さな一歩を重ねるし、中学生の指導歴が長い西武などでプレーした蓬萊昭彦氏をコーチに招き、編成部門を強化するため、スカウトも6人から8人に増員した。低迷するチームは経営

Sから10億円以上とされる広告宣伝費を得て最終的に黒字を取り纏う状況からどう抜け出すか。小さな一歩を重ねるし、その1つが来年1月に地元百貨店などで発売する「ベースボール」。



つ、公式戦チケットが当たる特典を付け、球場周辺での収益を伸ばしたい。横浜スタジアムがある国有地の横浜では営利目的の物件でできない規定だが、公園でカフェなどの店を出せば憩いの場になる。加地社長はアイディアを出せるよう、横浜で特別条例の制定を働きかけるという。

昨季は実質約5億円の負担した球場使用料主荷だ。同社長は「(一)増え、新人団選手がバスで市内の名所を巡ってお披露目したりと、地元を意識した仕掛けづくりに恵を絞る。

近年、フロントと現場の一体感に欠け、「お荷物球団」に甘んじている横浜。今季終了後、チーム低迷の責任をとって前社長や編成担当者幹部4人が退任し、新体制となった。親会社の株主総会では株主から球団売却を訴える声も出る中、強

96年度 98 200
し、縮小に生まれ変わることはできるのか。新社長の采配も一つの見どころとなるだろう。
(合六謙二)